

学校だより 希望の鐘

ひとつの鐘は、いまだにひびく

希望の鐘を
鳴らして



八 戸 市 立 小中野中学校

平成29年8月31日(木)

No.93

文責：校長
工藤聡

本当に“いい”体育祭でした

体育祭が終わって4日たちますが、もう随分前のことのような気がします。体育祭の練習の時は、「夏」という感じであんなに暑かったのに、今日はひんやりとして「秋」の気配が漂っています。振り返ってみると、本当に“いい”体育祭だったのではないのでしょうか。

体育祭の雰囲気を決定的にしたのは、何といっても両軍のマスコットだったと思います。大変丁寧に描かれており、技術的にもレベルの高いものに仕上がっていました。夏休み、3年生が制作しているところを見たのですが、紅軍は炎の先の部分、青軍も虎の白い毛の部分まで、丁寧に色を塗っていました。そういう根気のいる作業を続けたからこそ、素晴らしいマスコットになったのだと思います。個別には、青軍について、こういうマスコットを描く時に、一番難しいのが白（白軍）で、次に難しいのが青（青軍）なのです。そのハンデをものともせず描いているなあと感じました。虎の背景に月を浮かべていますが、それが特に大人っぽい印象を際立たせていると思いました。紅軍ですが、見た感じ、すぐにインパクトを与えてくれます。立体感があって、迫ってくるような迫力がありました。また、文字の配置と配色がとても良いため、それが大変目立つようになっています。

二つを並べて比較すると、紅軍は文字通り燃えるような「赤」を感じさせてくれます。逆に、青軍は、虎の迫力も抑え気味にして、いわゆる「冷静さ」、あるいは「静かに燃え上げる」ということを表現したかったのではないかと思います。動の紅軍、静の青軍とも言えるかもしれません。

両軍に共通しているのは、紅軍は新撰組の浪士がモチーフであり、青軍は坂本龍馬といずれも江戸時代末期のキャラクターがいて、それを虎や馬が守護神のように背後から守っていることです。まさしく、坂本龍馬と新撰組は宿敵でわかりやすい構図となっています。私としては紅軍も青軍も優劣つけがたいと思っていました。結果的に青軍がマスコット賞を獲得しましたが、本当に僅差（キンサ：少しの差）だったのではないかと思います。

次に私が素晴らしいと思ったのは、関川青軍団長と漆田紅軍団長による選手宣誓です。二人の体育祭にかけける思いがストレートに伝わってきました。団長というのは、表面的にもそうですが、見えない部分でもプレッシャーがあったりして、苦しい場面がいっぱいあります。それを乗り越えてきたという自負（ジフ：自分自身の取り組みを誇る）と自信が根底（コンテイ：もと）にあったのだと思います。それは、閉会式での団長のあいさつにも感じられました。さらに、団長を中心に、両軍とも応援リーダーが本当に頑張ったと思います。

得点には含まれませんが、長距離走に出場した男女9人の激走も体育祭に花を添えて（ハナヲソエル：美しさや明るさを加えること。ここでは、さらに体育祭らしさを増してくれたという意味）くれました。大森くんは、助川先生によれば、陸上の県大会に出場しても、かなりの成績を収められたのではないかとということでした。

何点か印象に残ったことを書きましたが、体育祭が成功した一番の要因は、全員がそれぞれの目標に向かって確実に取り組んでくれたからだだと思います。個人の努力の積み重ねは、足し算だと思います。それに比較して、集団の中の相互貢献は掛け算なのです。足し算であれば、ゼロがあっても、確実に数字を積み重ねることはできますが、掛け算は誰か一人でもやる気のないゼロであれば、すべて（全体）ゼロになってしまうのです。団長や応援リーダーだけでなく、誰にも乗り越えてきたドラマがあったはずです。仲間の励ましや温もりもあったはずです。それこそが見ている方々を感動させ、“いい”体育祭にしてくれたのだと思います。自分が、軍という集団に、少しだけかもしれませんが役だったことを実感し、連帯することの尊さに気づいてくれればと思います。そして、それを次の目標にも必ずつなげてほしいと願います。本当に“いい”体育祭でした。